

『世界四大陸の旅；ヨーロッパ・アジア・アフリカ・アメリカ各地の衣装図版つき』 ジャック・グラセ・サン＝ソヴール著 1806年刊

教授（西洋服装史担当） 辻 ますみ

さし絵に19世紀初頭の農民や市民の衣装の彩色版画が挿入されている、世界各地の紹介書、つまり現在のガイドブックに相当する本である。2巻本になっており、第1巻はヨーロッパ、第2巻はアジア・アフリカ・アメリカの代表的な都市や地方を取り上げ、その地理、歴史、気候、言語、産物、住民の気質、風習などが簡潔にしかもかなりの確に述べられている。作者グラセ・サン＝ソヴール(1757-1810)は、ハンガリーとレヴァント方面の副領事を勤めた経歴があり、旅の経験は豊富だったと思われる。またデッサンの技量も確かである。すでに1796年に『旅の百科事典』全5巻を刊行しており、本書はその第3版に当たる。解題に取り上げたのは「旅」という語を含むタイトルに惹かれたからである。

18世紀後半のヨーロッパではオリエント方面の旅に熱い注目が集まっていたらしい。ヨーロッパに長い間脅威を与えてきたオスマントルコとの関係が緩和して、外交関係が成立したことがその背景にある。オリエントに赴任した外交官らは、同行した画家に珍しい風俗や服装を描かせて、いち早く本国にヴィジュアルな情報を送った。たとえばフランスの外交官に伴われてイスタンブールに滞在し、多数の肖像画やデッサンを残したリオタール(G. E. Liotard 1702-89)がよく知られている。またトルコ国内の旅行が可能になった結果、ギリシアの遺跡に関心がおよび考古学もブームとなる。あのナポレオンのエジプト遠征は1798年に始まり、その成果『エジプト誌』は1809年より刊行される。こうした現象は話題になったE. W. サイードの『オリエンタリズム』に詳しいが、本書の

登場もそうした時代の空気を反映していると思われる。

こうした旅のブームを連想させることは別に、本書が面白くかつ重要なのは、地域の衣装すなわち後に「民俗衣装」と呼ばれるようになる衣装が、図版の中にすでに形を現してきている点である。とくに第1巻のヨーロッパ編はかなり正確に描き分けられており、作者自身の実写に近いと推察される。19世紀に装飾が加えられて華やかな祭りの衣装となっていた民俗衣装も、もともとは地方の農民服であり、町の住民の衣服であり、仕事や作業をする仕事着でもあった。本書の図版はそのことをはっきり示してくれると同時に、どの地域の住民の服装も基本になっているのは、都会の流

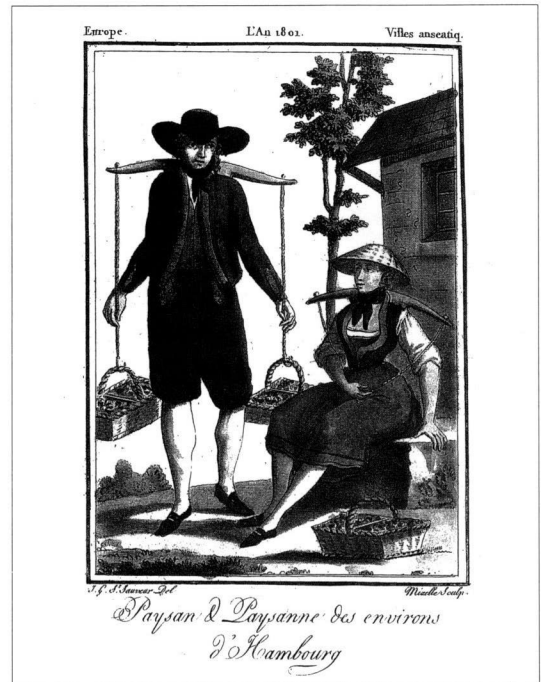


図1 ハンブルグ近郊の農民 1801年

行の影響を受けていない18世紀の衣装であることも教えてくれる。それは、刊行当時の衣装つまりナポレオンの帝政期の流行衣装が、本書の図版にはパリとロンドンとウィーンとヴェネツィアといった大都市にしか現れていない事からもわかる。他の50箇所ばかりの地域の図には、服装やかぶりものにはっきりと地方色が現れており、民俗服のルーツに出会った感じがする。

一例としてドイツのハンブルグのページをみると、町の地理と歴史、商業や産業などの説明に続いて、図1にある農民に触れ、「農夫は小さなジレに上着、黒の太い半ズボンに大きな帽子という身なり。農婦は短いスカートに袖無し黒の胴着、美しくひだをとったブラウス、妙な形の大きな麦わら帽子、男のように黒いクラヴァットを首に巻く装い。彼らは果物を詰めた籠を両天秤でかついで、町の市にやってくる」と解説してある。ハンブルグの市を賑わしたこの図の近郊農民は、いかにも田舎風な物売りに描かれていて懐かしさを感じさせる。ところが、実際に20世紀の前半、第2次世界大戦前までこのままの姿で市場に現れていたことを、偶然にもこの夏のハンブルグ歴史博物

館の特別展で教えられて驚いた。生活に密着したこうした民俗服の存在の確かさを実感すると同時に、主として上層階級の流行を対象とする一般的な服装史のなかに、どのように民俗服を位置付けていくか、という課題に一つのヒントを得たように思う。

旅のガイドとして面白そうなトルコの町スミルナ（現イズミール）やコーカサス地方はどうだろうか。「毎日のように世界各地から入港するたくさんの船や遠くからくるキャラバンの荷、トルコ人・ギリシア人・ユダヤ人・アルメニア人そしてヨーロッパ人も住む国際的な商業地スミルナ」という解説に続いて、しなやかですらりとした体を包む長くゆったりした薄いローブがなまめかしい、最も扇情的なスミルナの女性の衣装が描写されている(図2)。またコーカサス地方は古来より女性があやしいまでに美しいことで名高く、いまでも近隣諸国の君公に高価に買い取られる大事な商品になっていると書かれている。トルコの衣装はア・ラ・テュルク (à la Turque) の名で、またコーカシアはア・ラ・シルカシエンヌ (à la Circassienne) の名で1780年代のフランスやイギリスの流行ドレスに取り入れられており、フランス革命期のブルジョアの衣装にも少なからぬ影響を与えている。本書は旅のガイドブックとしてもおもしろいが、服装史に欠けているディテールを埋めたり民俗衣装の正しい情報を確認できる点で、私どもにはたいへん有難くかつ貴重である。いつもながら本学図書館の蔵書の豊かさに感謝すると共に恵まれた環境にあることを痛感する。

第2巻には図版の衣装表現の正確さに疑問が残るものが多い。既に出版された諸国の民俗衣装の名著からの借用が一部あるようにおもわれる。日本を含めて東南アジア一帯の正しい描写はやはり19世紀後半を待たねばならない。

欧文書名: *Voyages pittoresques dans les quatre parties du monde, Tome 1~2, par J. Grasset de Saint Sauveur.* (K383.1-G-1,2)

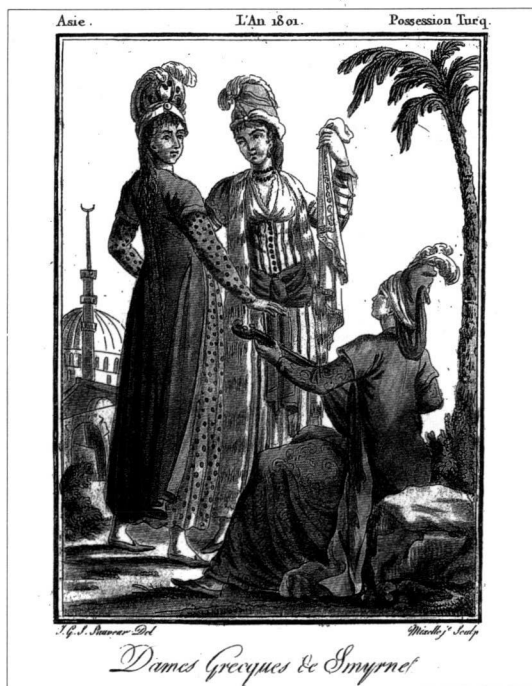


図2 スミルナのギリシア女性 1801年